

第二次大戦と少年時代

竹内 文治（昭和3年生まれ）

18年4月、中頸城郡なかくびきぐんの日本海沿岸にある虫生岩戸むしゅう（郷津）地区に原油生産拠点を有する帝国石油（株）郷津鉦場じょうつこうじやう、従業員数70人、生産原油量不明に配属される。

会社の上司から南方派遣ほくせんの説明があり、陸軍はスマトラ島、海軍はジャワ、ボルネオ島へ行くことになることと聞かされる。期日不明だけれども徴用命令は早くなる可能性もあるので、各人覚悟を決めておくようにと言われる。目的は南方油田の確保、即復旧、開発をして生産原油を本土に輸送する使命を背負った任務を果たすためだと教えられ、やがて海軍徴用の命を受ける。9月1日、鶴見市つるみの大本山総持寺そうじじに集合、海外派遣の為、予防接種や軍隊生活の基本について1か月間お寺に泊まり訓練が行われることになった。あっと言う間に総持寺の生活が過ぎる。この時一つ屋根の下で勉強した同期生が100名以上と、秋田、山形、千葉方面から参加した軍属ぐんぞくは300名を越えた大勢となる。予定された1か月の期間満了、一旦家庭待機の命令を受け帰省した。

10月15日、出征祝いを兼ねたご馳走を腹いっぱい食べた思い出がある。『10月21日、浜松町の雅叙園がしよえんに集合せよ』の命令が下る。10月24日、品川駅近くの高輪泉岳寺たかなわせんがくじ（赤穂浪士あこうろうしが眠る墓標が並んでいた）で、海軍軍人と軍属が混成の部隊編成が始まる。吾々もその隊列の中に加わり、品川駅まで行軍して軍用列車15両連結に乗る。車窓は閉めたままで、勝手に開けることは厳禁となっており、軍人等が常に監視している。小田原、熱海、京都、広島、門司、下関、熊本、佐世保の名が記憶に残っている。段々坂の町並みを下って行けば海と岸壁がある軍港の中に大きな船が係留けいりゅうされており、吾々の乗る船はどの船なのかと私語が交わされ、不安顔で彼方此方を眺めていた。船名は浅間丸あさまとわかった。

自分たちの泊まり場が決まり落ち着く暇もなく甲板かんばんに集合、海軍将校しやうこうが数人並んでいる片側から、いかめしい顔の仕官が大声で、本船乗船者となった貴様らに船内の生活と規則について説明すると申され、節度ある態度で臨むこと及び航海中の注意事項や敵戦艦の攻撃に遭った時の避難ひなん要領ようりやうが厳しく言い渡された。違反した者に対しては厳罰刑げんばつけいがあると言われて縮み上がった思いがした。

長崎港沖合いで船団を組み、駆逐艦くちくかんが1隻と僚船15隻、中央部に浅間丸が位置した輸送船団である。軍人か船員か知らないけれど、自分達に貴様らは祖国日本の見納めになるかも知れぬからよく見ておけと……。暗闇の彼方に山の稜線りやうせんが月明かりに浮かんでいる。

東シナ海玄海灘げんかいなだを渡る間唯1回だけ『敵潜水艦現れる、総員上甲板に退避せよ』の放送が響き

渡り、我先にと救命具を持って階段をかけ登ったことがあった。幸い攻撃は受けなかったが、遠くで駆逐艦から投下した爆雷が**大砲**を撃った音が解らないが耳の中に聞こえた。3、4日も続いた荒波の狂った海洋が次第に穏やかになり、やがて台湾の南端にある高雄港に入った。

南シナ海を陸地沿いに南下、11月8日、シンガポールに着く。ここまで輸送して頂いた浅間丸から下船命令が出て、飛行場近くの兵舎に一時待機することになる。次の船舶が到着するまで陸上生活が始まる。毎日海軍の**教練**（軍規と手旗）が続く。待機生活に別れる日が訪れた。先日見たばかりの航空母艦に乗艦する吾々軍属は、1日も早く最終任地に輸送する為の命令があった。吾々は感激一人の思いを抱きつつ、初めて軍艦に乗る喜びで船内の区分された場所に配置、艦と運命を共にしても惜しくない気持ちになった。

シンガポールを出発してから両側に駆逐艦を従えながら飛行機に守られ任地に向かう吾々の任務の重大さは誰知る由もなく、南方油田の確保と石油の本国輸送が至上命令であったと上司から教えられた。ボルネオ島の北西を通りマラッカ海峡を南下、タラカン島の**棧橋**に横付けされる。空母内の生活は4日ほどであったが、さまざまな新体験の日々が懐かしい。(ラムネ製造の手伝い、酒保、中頸城郡出身飛行兵、副艦長との会話、菊の紋章)

次に乗った船は千トン級の貨物船であり、セレベス島とボルネオ島の間を航海する静かな海で、陸地を眺めながら赤道を越えて第二のラバウルと称された**要塞**の拠点バリックパパン港に到着した。マワカム川を上流に登ってサマリダ市の手前にあるサンガサンガ油田(第101海軍燃料敵)に到着、**棧橋**から上陸、この地が今後吾々の生死と共に働く聖地である。

着任人員は三百人超で逐次夫々の部署に配属される。これから一年間位は青春とは名ばかりの歳月を過ごし、戦況我に利あらず、敗色が押し寄せる中を国家のために自分の命を捧げねばならないの一言で、陸戦隊編入、空襲、**陣地構築配置**、**敵軍進攻交戦**、十二キロメートル前方に銃砲装備した**豪軍**が迫り、空は完全に**制覇**された中で、明日明後日にも総攻撃命令が発せられる時、**大詔**が下される。昭和20年8月15日、わが日本帝国は無条件降伏をした。

9月1日オーストラリア軍千人が重装備した上陸用舟艇で進駐してきた。無条件降伏の惨めさを身をもって体験、それから次々と住居を変えさせられる。食糧事情の悪い中で栄養失調とマリアの併発で亡くなる人数が毎日報告される。本部組織の中に従事していたため、食べるものに関わる特別の苦痛は感じなかった。小高い丘は、埋葬された**墓碑**が立てられ、永遠の眠りにつかれた人々の多きを物語っている。

現地住民と物々交換する頼みの衣糧物資をかくし持っている**豪軍**が**家宅立入**物色をして貴

金属類、酒類、時計類等は没収される。本国送還^{もうちかんとん}2週間前にスクリーニングキャンプと言う施設に収容される。ここは私物所持品の検査が行われる。戦況悪化前に作った氏名入りの銀製指輪を大切に持ってきたが、遂^{ついに}にこの検査前に堀の中に投げ捨てた悔しい思いがある。

一応上船許可があり、沖合に停泊しているリバティ号(収容人員千人)から下ろされた縄梯子^{なわぼしご}で登り、夢中で甲板に乗り移ったときは、帰りたい一念で誰の顔も血走っていた。